

「結婚の秘跡」

主任司祭 晴佐久昌英

カトリック教会の七つの秘跡のうち、結婚の秘跡だけは一人で受けることができない。当たり前だと思ふかもしれないが、その事実は、この秘跡の本質をよく現している。

秘跡は、「神と直接触れる恵み」であり、いうなれば、「天国の扉」である。厳しい人生という「地」を生きる人間は、その扉を開けて「天」に触れ、天の父の愛に触れて真の幸いを得る。

そう考えると、イエスこそが真の秘跡であるという意味もよくわかる。イエスが自らを「私は道である」というのは、自分こそ神と人を結ぶ「いのちの門」であり、自分を通らなければ誰も天の父のもとに行くことができないと知っていたからである。

キリストのからだである教会は、このキリストそのものとして、常に天国の扉であり続けてきた。教会の七つの秘跡とは、地で苦しむ人間のために、天の父が特別の親心をもって開いてくださった、至高の扉なのである。

だから、洗礼ほどありがたい扉はないし、ミサほど尊い扉も他にない。ゆるしの秘跡や病者の塗油も、闇と恐れ在地獄に落ち込んでいる人にとっては命を救う非常扉であろう。しかし、これらの秘跡がいずれも一人で受けることができるのに対し、結婚の秘跡だけは一人で受けることができない。それは何を意味するか。

互いに相手の天国の扉となる。そういうことである。互いに相手のために秘跡となり、相手のために教会となるということである。すなわち、永遠の命を求めて魂の遍歴を重ねる相手を救うために、自分に死んでキリストとなるということである。

これ以上の愛があるだろうか。

しかしそれは同時に、もしもこの秘跡を壊すならば、それは相手の天国の扉を閉ざすことだということでもある。それ以上に恐ろしいことがあるだろうか。

信者の夫婦が、互いに相手のための秘跡として身を捧げて生きる姿ほど美しく教会的な姿はない。二人が互いに相手に触れるとき、互いに永遠なる天に触れているのである。そんな二人には、もはや「死別」などありえない。